

戦争体験文庫第 68 回資料展示

満洲への勤労奉仕



2025 年 3 月 1 日（土）～6 月 26 日（木）

2025 年 3 月奈良県立図書情報館編・発行

解 説

1938 年（昭和 13）から 39 年にかけて樫原神宮周辺の整備に、のべ 121 万 4 千人の建国奉仕隊員がボランティアとして動員され、その中には満洲から 1946 人、蒙古からの 5 人も混じっていた（『大和国史館概説』）。

その一方で、国内から満洲に勤労奉仕に向かう者もいた。「興亜青年勤労報国隊」である（以下単に隊とも略称）。樫原での建国奉仕隊は、観光ついでに「一日なりとも」の参加が呼びかけられていた（『紀元二千六百年』10、1938 臨時増刊号）のに対し、隊は茨城県内原の満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で数日間の訓練を受けたうえ、約 100 日間（学生隊は 30 日間）満洲等で開拓作業に携わる、より本格的なものだった。

隊については、近年大学による自校史編纂事業の中で、事例や研究が積み重なってきている。そのひとつ薄田千穂「興亜青年報国隊と第五高等学校」（『昭和期の第五高等学校』調査報告 4、2022、熊本大学五高記念館）は、次のような経過を明らかにしている。

1. 隊はもともと労働力不足に悩む満洲国側が、内地から毎年 10 万人前後の「満洲建設勤労奉仕隊」を招聘する計画を立て、日本政府に持ち掛けた。

2. 日本政府はこれを受け、陸軍が青年の訓練と大陸認識涵養を目的に加え、文部省が主管となって事業を進めることとなった。

3. 準備は 1939 年 4 月から急ピッチで進めた

4. 6 月末から 9 月中旬まで青年隊約 4200 人が満洲に、7 月中旬から 8 月中旬まで、高等教育機関学生からなる学生隊が組織され、1800 人が満洲へ、1600 人が北支蒙疆（北支那・蒙古・新疆）へ派遣された。

5. 準備不足による不備や、学生隊の場合肉体労働に従事させられることに不満が多かった。

青年隊の中には、奈良中隊に組織された百人余の姿もあった。中隊は居住地ごとに 3 小隊に区分され、そ

れぞれが帰国後報告書を編纂・刊行している（1 頁、ともに図書として登録）。

中隊内で調整されたのか、構成はほぼ同一で、多数の隊員が短文による回顧、観察、感想等を複数執筆し、これを時系列順に配列している。

行程は本文で細かく見ていくが、6 月 19 日に樫原集合、21 日から 28 日まで内原で訓練、29 日新潟を出航。7 月 3 日に東安省（現黒竜江省）朝陽屯の開拓団本部に着く。

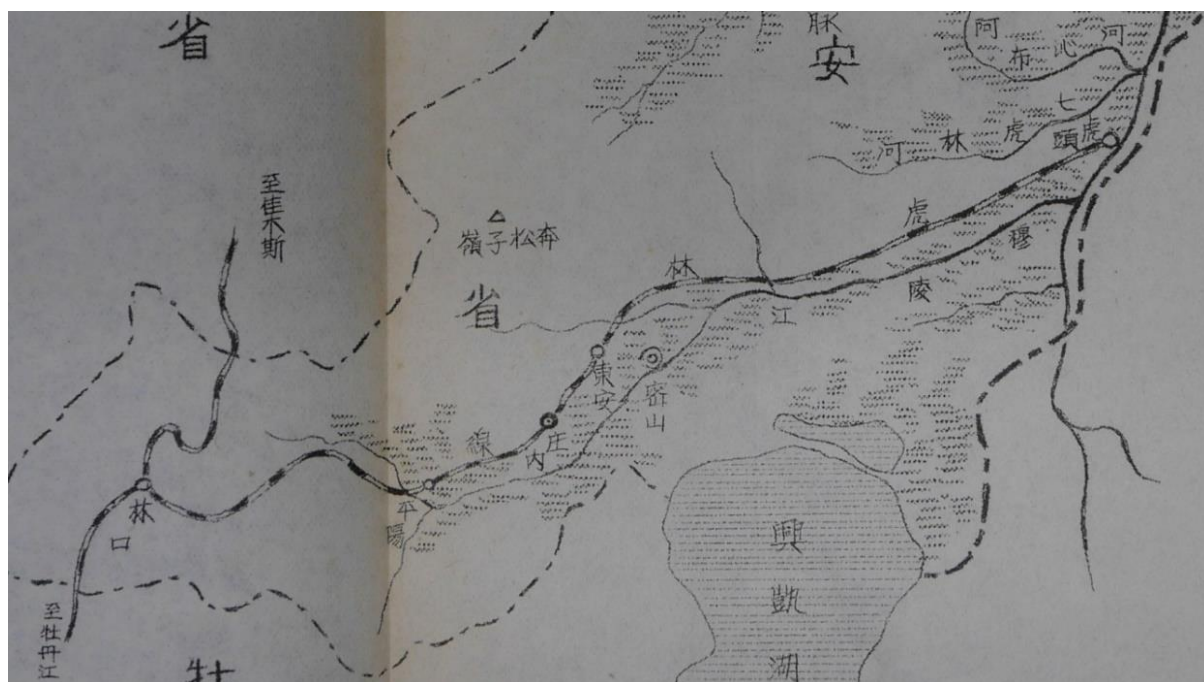
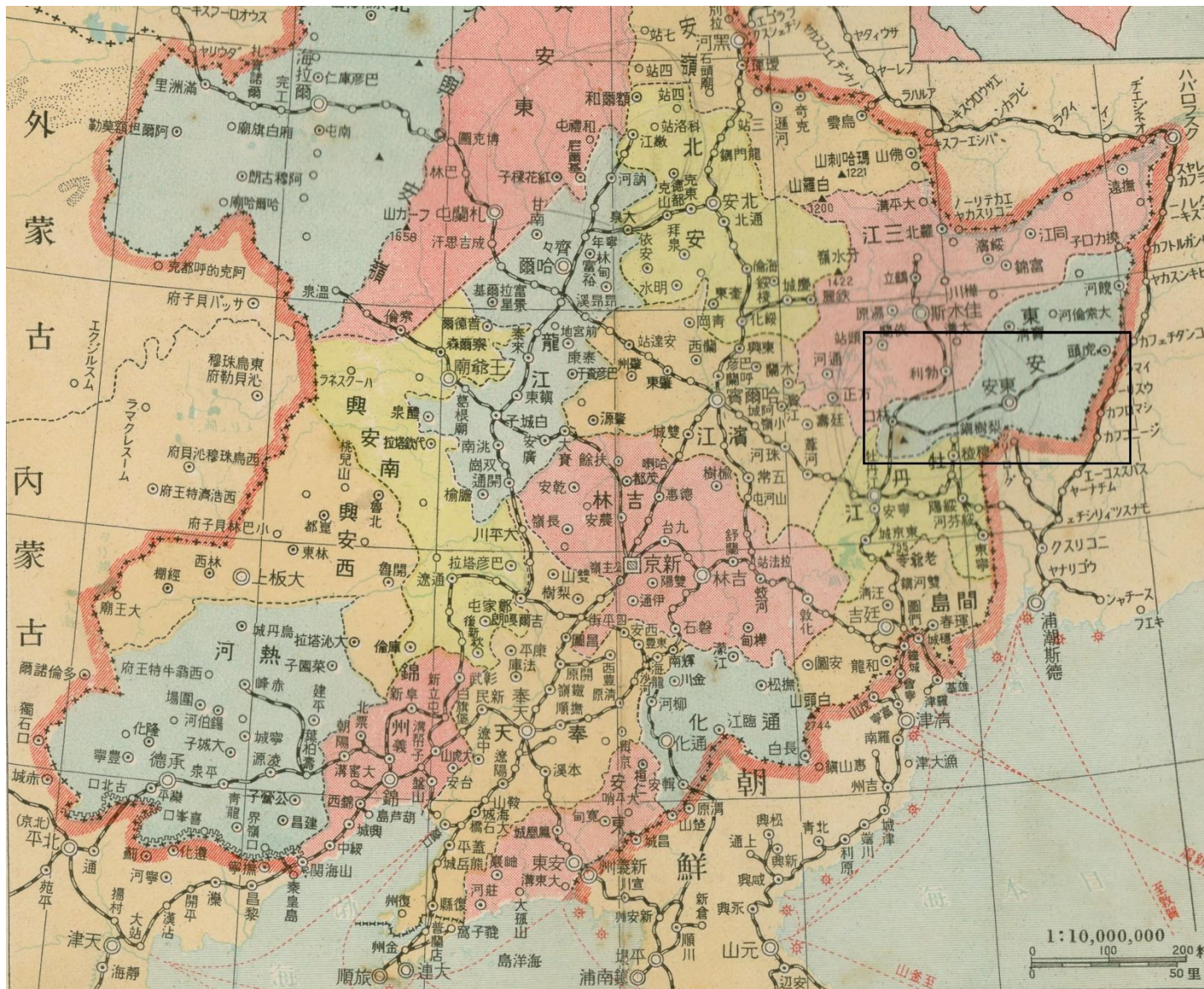
朝陽屯は南約 40 キロ、東 100 キロでソ連領沿海州に接し、満洲事変後に敷設された満鉄虎林線が国境の要衝虎頭に向かって北東へと伸びる地である。開拓団本部は虎林線庄内駅近くに置かれ、出身地ごとのに編成された村が周辺に点在していた（2-3 頁）。

なお長野県阿智村の満蒙開拓平和記念館が HP で公開している「全開拓団データ一覧表」によれば、朝陽屯（村）は終戦時に在籍人口 1084 人、うち約半数が引揚過程で命を落としている。

奈良中隊はここで 9 月 17 日まで道路建設や農作業にあたり、翌日以降満洲の主要都市を観光し、22 日大連旅順から出航し 9 月 27 日に神戸に上陸している。なお行き帰りは近畿及東海地方の各中隊と同道している。

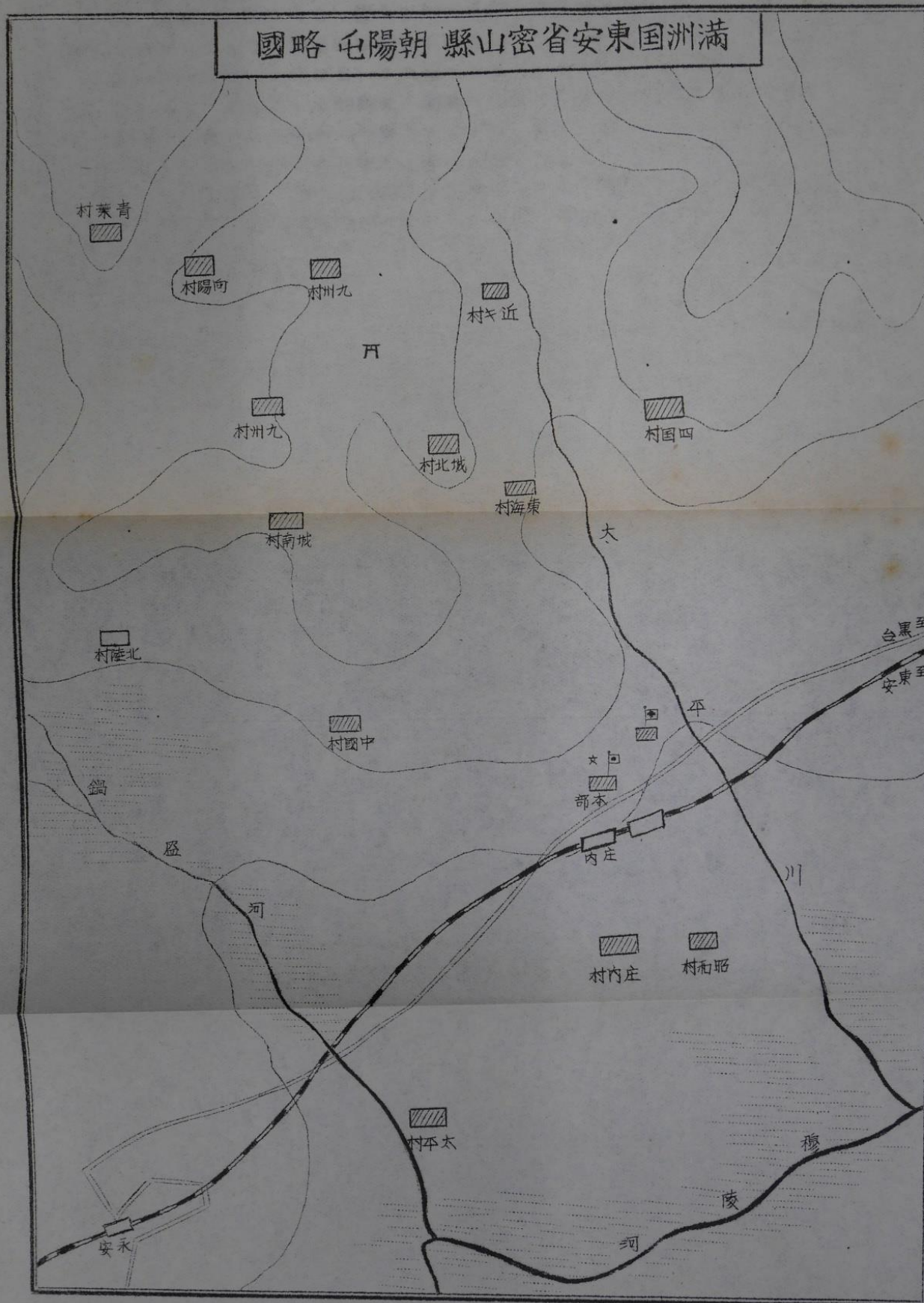
隊は制度を若干変えつつも翌年以降も続けられ、1940 年には満鉄北東線の国境の町黒河から南方約 100 キロの孫呉の開拓団に赴いた、奈良師範学校隊の隊としての日誌、参加学生の日誌がある（9 頁）。1941 年には、ハルピン西方浜江省肇東県宋の実践農場へ農学校隊として赴いた隊員の日誌がある（10 頁）。

この他にも、太平洋戦争開始前夜のこの時期には、県農会や農民道場等も独自に視察団を組織して活発に開拓団のもとを訪れており、それらの報告書も見られる。これらはまた改めて紹介したい。



上『コンサイス満洲国地図』東京地形社、1940 より、下『聖汗録』より東安省要部

滿洲國東安省密山縣朝陽屯略圖



『聖汗録』より朝陽屯周辺

1939 年興亜青年勤勞報國隊奈良中隊所属部隊幹部

満洲派遣隊長 陸軍(予備役)少将 藤懸末松

牡丹江方面隊長 大日本青年団指導部長 榊原孝

牡丹江方面隊付 大日本青年団指導部商工課長

鈴木健二郎

牡丹江方面隊付 奈良県農林主事補 屏之内勇逸

奈良中隊幹部 ()内は年齢

中隊長 奈良県社会教育主事 米田勇(36)

中隊長 王寺町会議員 酒井専治(46)

中隊長 五条町学務主任 吉川亀一(33)

第一小隊長 小学校訓導 藤本栄治郎(39)

第一小隊付 青年学校教諭 小山正明(28)

(奈良市、添上・生駒・山辺郡)

第二小隊長 青年学校教諭 志野清一(32)

第二小隊付 小学校訓導 森下謙賢(32)

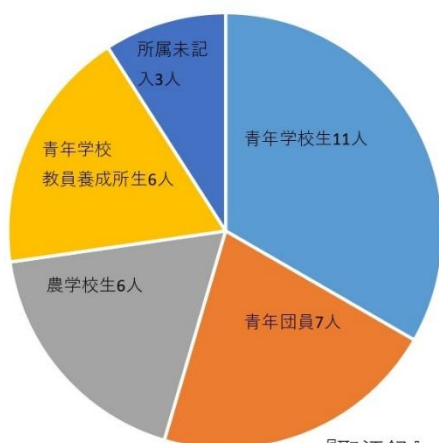
(山辺・磯城・宇陀・高市郡)

第三小隊長 青年学校教諭 中川清一(32)

第三小隊付 小学校訓導 上田直(26)

(南北葛城・宇智・吉野郡)

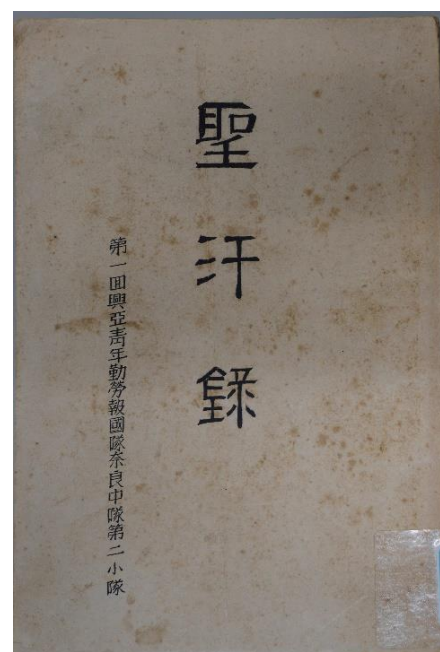
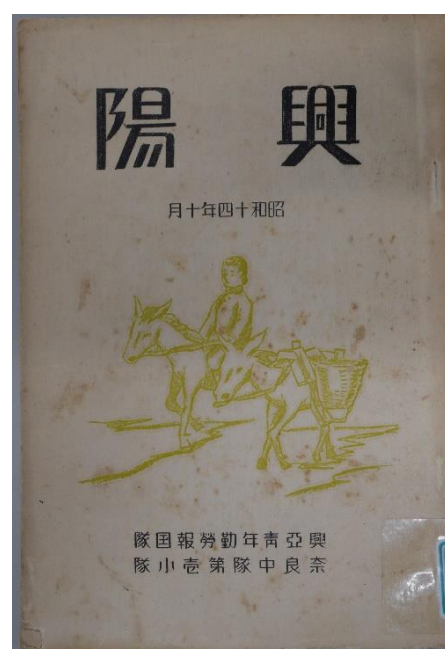
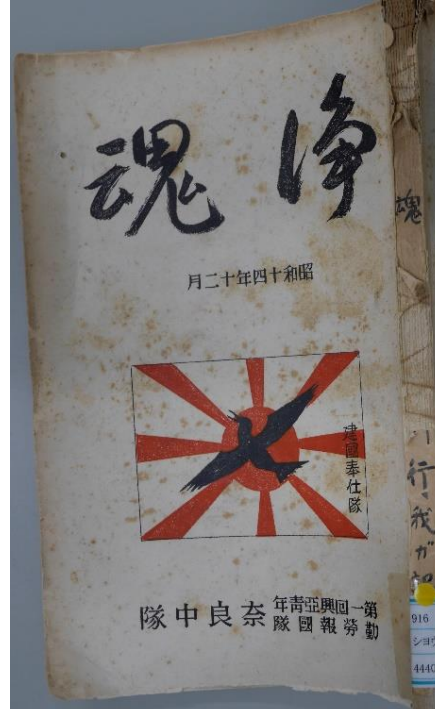
第二小隊員の構成

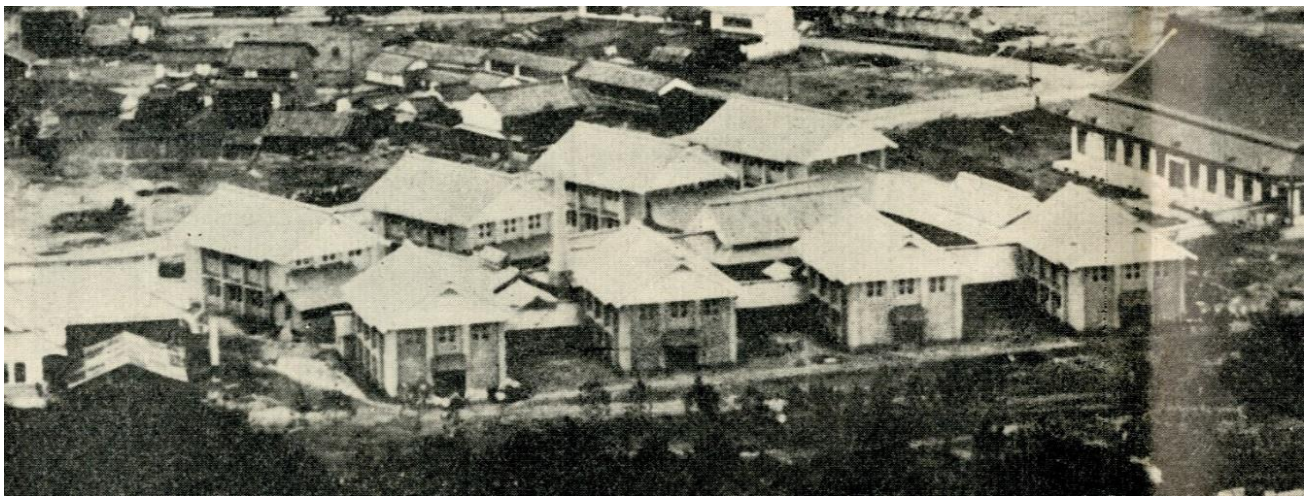


『聖汗録』16-18頁より

学校別の学生隊とは区別された青年隊にも、一定の学生が含まれていたことがわかる。

※青年学校は、中等学校に進学しない未成年者が、働きつつ在籍して補習教育を受ける機関。その教員を養成するための県立養成所が磯城農学校に併設されていた。





榎原道場の八紘寮(『榎原神宮と建国奉仕隊』阪急電鉄、1940)

1939 (昭和 14)

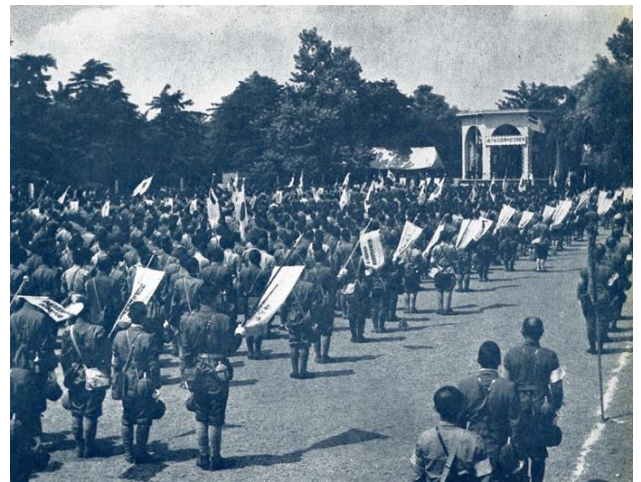
6. 13 中隊長以下幹部が内原入り (『浄魂』)

(以下『聖汗録』による)

6. 19 榎原道場八紘寮前に一般隊員集合

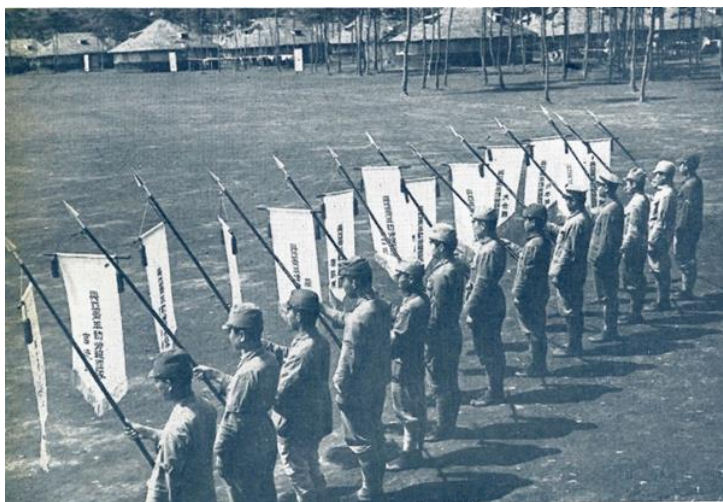
6. 20 神武天皇陵・榎原神宮参拝、建国奉仕隊に参加
奈良へ向かい春日神社参拝後県庁で歓送式
京都へ行き内原行臨時列車に乗車

6. 21 内原着、幹部と合流し以後満蒙開拓青少年義勇
軍訓練所で教育、訓練を受ける



日比谷公園における壮行会

(『国際写真情報』18-3、写真は 7.2 別班のもの)



内原の訓練所における隊旗授与式(同上、写真は 7.1 別班のもの)

写真上部に日輪兵舎が見える

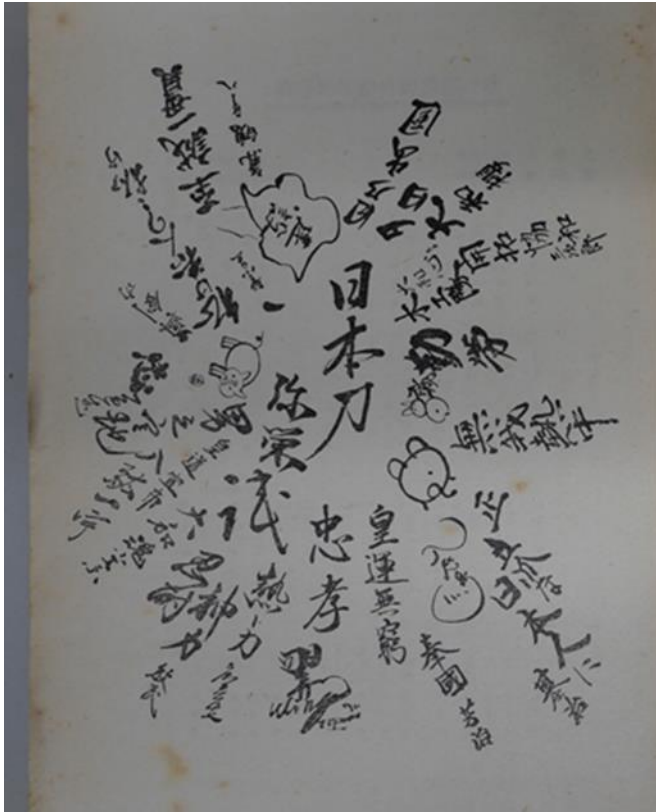
6.27 内原発、日比谷で壮行会の後、宮城・明治神宮遙拝
し、上野から新潟に向かう。翌日新潟出航。

7.2 朝鮮半島東北端で満洲やソ連との国境付近の港町羅
津に上陸。壮行会后、列車で豆満江を経て満洲入り

7.3 牡丹江を経て林口へ

新潟港埠頭に集合した奈良中隊等の隊員たち(同上)





第三中隊員の寄せ書き(『浄魂』)

上田直「興亜青年勤労報国隊」『浄魂』6頁-
報国隊の真義を要約すれば、

一、満洲建国の精神を把握し日満特殊不可分関係、特に共同防衛の組織を深め、民族協和の中核たるの規範を実践すること。

二、厳格なる規律と秩序ある団体訓練を養ひ、日本青年として襟度並に熾烈なる国家観念を涵養する。

三、神聖なる勤労の真の価値を体感しかつ勤労奉仕を通じて心身の鍛錬陶冶をなす。

といふに尽きるであらう。

森本孝治郎「七月四日」 『聖汗録』144頁-

「すきんだ物淋しい気持で」 こういへば憧れの満洲に第一歩を印する時の形容詞には一寸似はぬかもしれないが、本当の気持はこれだった。之れから殆んど家のない曠野を行軍する事約二里、満洲の八時はもう相当暑い。長い旅路の疲れと暑さに我等は皇軍将士の気持になって歩む事二時間やがて遠くから聞へて来る万歳の声、移民団の団員の方々、国防婦人、小学生達が出迎へてあてくれるのだ。

東川志郎「神前に香を焚きて」『聖汗録』210頁-

目的地たる九州村に着いてから我々待望の分宿しての道路建設が始まるのである。各班に分かれそれぞれ厄介になる家へと行く。自分達五人は第二班にて荒木様の宅と聞けば本当になつかしい。ピンと頭に浮かぶ、あの白木の骨箱なのだ。【略】荒木様は故郷の親達より帰へれ帰へれと再三再四云はれてゐるが然しそれでは自分として妻子を死なしに來たのと同様だ、如何なる事がありても初期の目的達成に此の大陸満洲の礎となる覚悟ですと聞かされ、本人の決心の強さ其の真剣な態度、立派なる言葉、これこそ日本人だ。

覆面生「鷹当番」『浄魂』116頁-

何時か隊員より懸賞募集して鷹公の名前をつける事にした。今日は鷹公晴れの名前をつける日であるので久しぶりに外へ出してやれば、雄々と大空を飛び廻っては宿舍の屋根にとまって居る。夕方帰って来るだろうと思って居ると帰って来ない。鷹公よ。自分の名前をつけてもらふのがいやなのか。我が心が鷹公に通ずれば明朝にでも帰って来るだろうと一つの望みを持って居たが帰って来ない。

松下正徳「外出の喜び」『聖汗録』160頁-

買物と云へば黒台へ行かねばならぬ。一里半の道も吾等が鍛へし健脚で流行歌を高らかにスクラム組んで心も軽く足軽し、大陸では一里や二里の道は何んでも無い。一寸出ると一里位は行かねばならぬ。吾等の公休外出日、憧れの黒台に外出だもの。隊員全部で町は賑わって居る。臭気ブンブン、ニンニクのくさみには大和健児も完全にノックアウトされた。

上林安彦「麴羊追ひの一日」『興陽』47頁-

右を見れば点々と草の上に移民団の家が白く輝き、ぽかりぽかりと浮いて映ずる景色こそまるで箱庭の様だ。或は幼い時に学んだ竜宮に來た気持。又桃源の記を思ひ出す。遙か遙か左の方向に国境を眺められる絶景位地である。これが所謂満洲式の大放牧場だ。



に陸大を夏

隊國報勞動年青亞興

『写真週報』80号(1939.8)より 撮影は満洲国通信社(国立国会図書館デジタル送信資料を利用)

キャプションは以下のとおり

今夏文部省の取り計ひで現地軍当局に協力、灼熱の満洲、北支に皇軍将兵とともに第一線の労苦を具さに体験しつゝ、大陸の認識を深め、そして祖国の偉大さを如実に知った興亜青年勤勞報國隊の学生、青年約一万は、尊い一ヶ月にわたる鍛錬と奉仕の生活を了へ、八月下旬から各班相前後して陽焼けた顔にはち切れるばかりの元気をたたへ、懐かしい母国の土を踏んだ。

陸軍少将藤懸派遣隊長の下に、農耕に、開墾に、医療に精いっぱい腕をふるった満洲班青年(全国青年団員、青年学校生徒からひろく募集された勤勞青年)の活躍に新東亜建設の尖兵たるべき覚悟と意気をうかばう。

この天地、この土壌、鋤に起された土から放つ肥沃な香、『オーイ、何てこの地は肥えてるんだらう』日本は狭い、日本は狭いと鋤は囁く。

畑壽一「道路建設」『興陽』63頁-

黒い土が青い空にくっきりと飛ぶ。盛り上がった筋肉に汗が滝の様にながれる。赤銅の肌に真珠のような汗が強い太陽に玉の様にひかる。ザックと踏むスコップにやはらかい土が崩れる。皆黙々と作業を続ける。幅七米の道は美しく咲き乱れる草原を横切って見えなくなって続いてゐる。始めて此处に草を刈りに来た日、暑い日だった。

井上静柳「沃野に立ちて」『聖汗録』292頁-

一、地平の草に置く露にきらめき出でる金色の朝日を浴びて我立てり此处満洲の大沃野
二、働き得るの喜びを鋤に充たして今日も亦尽きざる力ためさなんあ、広漠の大平原
三、大陸流る微風は触れてさはって流れ行く流れて尽きぬ玉の汗あ、大業のたのしさよ

『聖汗録』より奈良中隊第二小隊の作業内容

7/4	黒台駅下車、朝陽屯宿舍へ行軍。舎内整理	8/14	盆休み
7/5	弥栄神社建築地下草刈り	8/15	盆休み、ソ連事情の講話聞く
7/6	舎前溝堀り	8/16	虎頭見学
7/7	九州村道路建設	8/17	牧草刈り、本部農場作業
7/8	牛羊の放牧、午後は雨休み	8/18-20	牧草刈り
7/9	雨休み、午後開拓団本部長矢口道愛講演	8/21	公休日。満洲政治の講話あり実質休みなし
7/10	小隊を三分し木工・溝堀り・粃水洗	8/22	牧草刈り
7/11	公休日、午後は付近部落見学	8/23	牧草刈りと結束作業
7/12	宿舍周辺の溝堀り等	8/24	牧草刈り午後は暴風雨で作業中止
7/13	粃水洗、葱の定植	8/25	軍用道路建設奉仕
7/14	九州村道路建設	8/26,27	牧草刈りと結束作業
7/15	舎前広場に土運搬、地ならし	8/28	牧草刈りと結束作業、平沼内閣総辞職を聞く
7/16	本部農場にて除草、大根収穫	8/29	雨休み、小隊対抗演芸大会
7/17	運動場地均し	8/30	本部出荷部整理、本部農場苗床直し
7/18	舎内、野菜貯蔵庫の整理	8/31	道路改修奉仕
7/19	倉庫整理、販売出荷荷造り	9/1	公休日。実践本部員との座談会
7/20	本部農場除草など	9/2	雨休み
7/21	公休日、一部は黒台見学	9/3	雨休み
7/22 -25	九州村道路建設	9/4	山の作業
7/26	九州村で作業終了のため川魚取り、村民と演芸大会	9/5	運動会準備地ならし
7/27	道路仕上げ作業、山奥で道路建設作業	9/6	運動会準備地ならし
7/28,29	山奥で道路建設作業	9/7	運動会。午後は雨休み
7/30	山奥で道路建設作業、午後は山狩りするも獲物なし	9/8	雨休み
7/31	山奥で道路建設作業を終え中隊本部に帰る	9/9	雨休み
8/1	公休日	9/10	中国村、奥山の道路建設
8/2-6	開拓団員の宅に分宿し作業	9/11	公休日。分宿先への挨拶や満人小学校見学をする者等
8/7	東安市街地見学、満拓出張所長の講話も聞く	9/12	奥山道路建設
8/8,9	秣刈り	9/13	奥山道路建設、一部は国境見学
8/10	巡回講師よりロシア事情聴き本部農場作業	9/14	雨休み
8/11	国境の半載河口見学	9/15	運動会
8/12	国境付近へ軍隊慰問遠足	9/16	帰還準備
8/13	五族協和・満洲拓殖の講話後、乾燥(ママ、乾草?)刈り	9/17	帰還式後、庄内駅を出発

吉川三次郎「朝陽屯移民団の将来」『浄魂』88 頁-

朝陽屯開拓団は入植以来満四ヶ年にして現在では邦人家屋三百戸にして全部を十三区分され色々なる部落がある。端しなき曠野朝陽屯の曠漠、実に一万二千町歩、駐屯地中央には開拓団本部、消費組合、出荷組合、加工場、醸造場、病院が建設されて内地の模範村に於ても見る事の出来ざる新機軸を以って着々新農村建設の歩を進めて居り【略】現住民族と云へども近年移住せるものにして其の歴史は新しく文化程度の低き【略】

涌本芳治「満洲の子供について」『浄魂』94 頁-

突如イワイワとするどい声に僕は水田の除草の手を休めて顔を上げた。見ると満人の十二三才になる子供が牛四頭を綱にてつなぎ合せて其の内の一頭にまたがりおちを手に持って牛を追ってまた続ひニ三人同じ様に三頭四頭と一緒につなぎ追ってくる。僕は其の姿を見た時手つきの上手な事に変なれてゐる事に驚くと共に感心させられた。

宝来茂「懐かしの宿舎を後に」『浄魂』181頁-
遙か南方にのぞむソ聯の山々、広大な平原、赤い赤い夕
日、豊饒な作物、満人の農耕、牛馬の放牧、この懐かし
い宿舎、大陸的気風に馴れた、私達は本日この朝陽屯を
離れるのかと思ふと淋しい様な、もっと居たい様な何と
も分からない感情で胸が一ぱいだ。瞼に熱いものがこみ
上げて来た。

『聖汗録』より帰途行程

9.18 朝牡丹江着、忠霊塔参拝後市内見学

ハルピンに向かう

9.19 朝ハルピン着。

ハルピン神社・忠霊塔参拝、露人墓地に参る

ハルピン奈良県人会長の話を聞く

9.20 朝新京着。地方巡視に向かう満洲皇帝を奉迎

新京神社参拝

県人会員の話を聞きその世話で満洲国務院見学

大山勝治「国務院の感想」『浄魂』193頁-

当院の建物は美しく大きな建物で四階建である。隊員
は全員四階迄で上り新京の町を見下ろした時、市は碁盤
の目の様に道は通っている又満州での一番美しい町
で首府である。

9.21 朝大連着、旅順に向かい各種日露戦争戦跡見学

九月二十二日『聖汗録』17頁-

午後二時出帆の予定でそれまで時間があるのでこの間
に大連で土産物等も沢山買へると思ってゐたのにもか
、わらず、大連は「コレラ」が流行し毎日毎日沢山の
生命を奪つてゐるとのことで一切下船を許さず、と下命
せられた。隊員一同色もなかった。かくして不平満々の
内に正午過ぎ船首を故国におけてドラの音も淋しくコ
レラの大連を出帆した。

9.24 船中で奈良・滋賀・長野・山梨4中隊対抗演芸大会

9.27 神戸上陸解隊式。

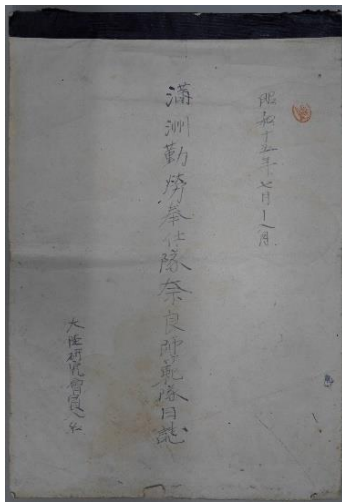
奈良駅で歓迎を受け日満国旗を先頭に市中行進

西田重次「友よさようなら」『聖汗録』325頁-

秋風面をゆすりて虫の音すだく九月二十七日午後五時
五十分鬱蒼たる春日の神苑に点綴する灯火に胸打たれ
つ、樹間見ゆ十五夜の満月を仰ぎて無事帰還を春日の
神に報告する。斯くして午後七時県庁前庭にて解散式図
書館西側にて夕食の折り詰めを頂戴す。お、思ひ出多き
三ヶ月の想ひ出を抱きて今各自が別れようとしてゐる。
思ひ返せば六月二十日檀原の宮にて神劔を拝受し整地
に奉仕を捧げ一夜を共に八紘舎に明かしてより皆様と
は忘れ難き生活を送りました。



絵葉書
「大新京の印象」
より

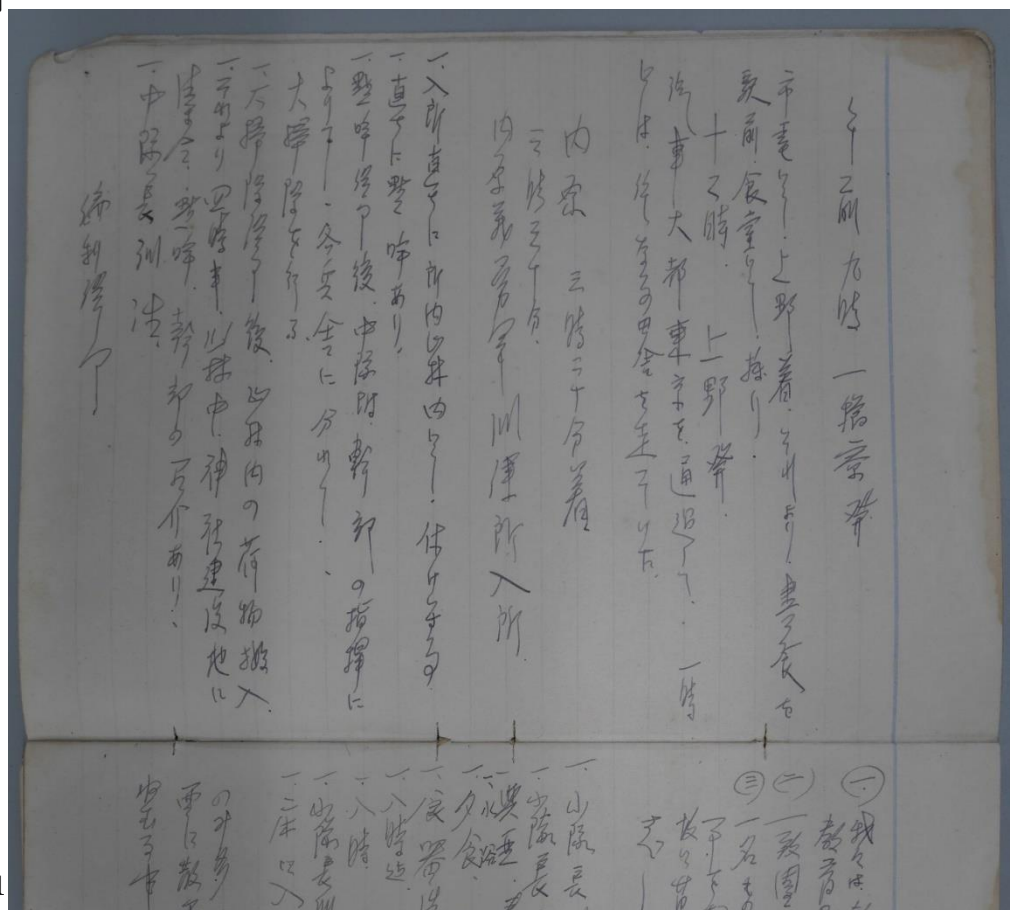
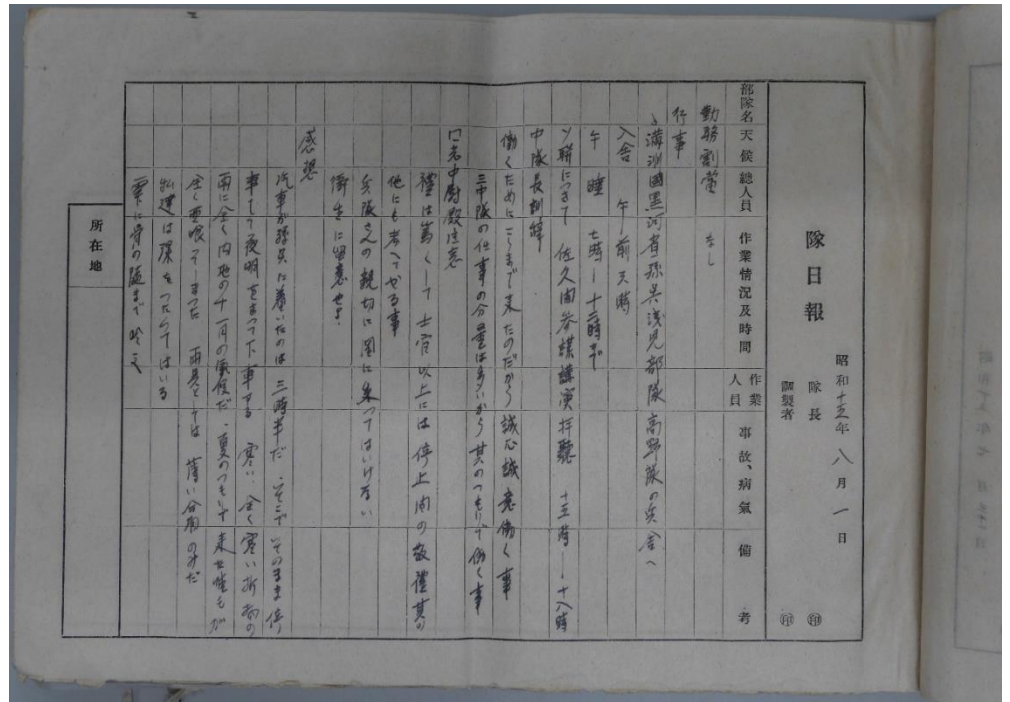


1940 年は、学生隊と青年隊を区分して、興亜学生勤労報国隊が組織された。うち満洲へ派遣されるのは医療・農業等専攻を活かした作業を行う特技隊と、師範学校生からなる師範隊とで構成された。

上は奈良師範隊の日誌(日報)で
行程は以下のとおり。

- 7.19 奈良を出て東京へ
- 7.20-26 満蒙開拓青少年義勇軍
訓練所で訓練
- 7.27 敦賀から出航
- 7.29 朝鮮半島清津上陸
- 8.1 黒河省孫呉着
- 8.2-10 土壤運搬など作業
- 8.11 黒河見学
- 8.12 孫呉出発
- 8.14 ハルビン見学
- 8.15,16 新京見学、式典
- 8.17 奉天見学
- 8.18,19 旅順、大連見学後

日誌は船中の8月22日で終わっているが、文部省教学局編、発行『興亜学生勤労報国隊報告書』1941によれば隊は翌23日に神戸に上陸



これに参加していた木村隆による 8 月 5 日までの〔興亜奉仕隊満洲訪問日記〕(下写真)と原稿用紙への清書の一部〔朝鮮・満洲訪問日記〕(三碓村木村家文書 91-2-8,11)も残っている。

5月2日から8月4日までの行程のうち、西村の日記は6月28日で途絶えているが、5月3日から7日まで満蒙開拓青少年義勇軍訓練所で訓練後、東京・新潟・羅津・牡丹江・ハルビンを経て13日実践農場へ着。馬鈴薯の栽培や炊事当番の作業を書き残している。

西村和巳

10

農業開拓民入植地に 百萬町歩の造林計畫

滿洲國で本年度より實施す

(新京發) 滿洲拓殖公社と協力し、滿洲國の開拓農民入植地の造林計畫を樹て、排水防風、木材供給、土地利用、治水および風致を主目的として廿四年五十萬戸の集團移民計畫に對し、一戸當り人工造林面積を町歩とし、總面積百萬町歩を廿九年に亘つて行ふこととなり本年度より實施することとなつた實施目標は左の通りである

一、一戸當りの目標は(イ)面積一戸當りの林業地面積を六町歩とし一町歩は農耕地防風林に使用し五町歩は林業專用地とし一個團を單位としてなるべく集團經營をすることとする(ロ)施業方法、耕地防風林に供する一町歩は主として地域内の農耕地不適地を選び三、四年の間に造林を行ひ土地の利用を兼ね耕地防風の効果を導くこととする

二、一箇團當の目標(イ)面積各戸當り林業專用地五町歩を團單位に一箇地として農耕地となり得る林野を選定し團において管理經營する(ロ)施業方法、集團經營の林業專用地は主として天然力により林地を更新し、森林收産の保護をはかり、うち一戸當り一町歩に對する肥沃地を選び、苗木供給

は移民團設置の状況、人夫供給關係、苗木供給輸送の便不便などを考慮の上決定

五、造林實行方法、第一年度、第二年度、林野局開拓移民と共同實地調査を行ひ細目を決定第三年度苗木造設、苗木の養成、第四年度苗養成、第五年本年春季より造林實行

興亞青年勤勞報國隊 派遣隊長藤懸少將 滿洲班の編成終る

各指揮官
指導者 内原へ入所

(東京發) 一萬一千名の興亞青年勤勞報國隊の指揮官については文部省が中心となり詮議を進めてゐたが十日滿洲派遣隊長(滿洲班八千名)として東部防衛司令部付少將、至東部防衛司令部付少將が決定、滿洲に於ける三方部長官にその

開拓會社の尊き人柱

殉職記念碑近く建設

編成(十九箇中隊) 富山、秋田、新潟、石川、徳島、香川、愛媛、高知、大分、熊本、山口、岡山、宮崎、鹿児島、沖縄、(濱江省) 兵庫、和歌山(龍江省) 北海道、青森(五省林省)

三江省方面隊

隊長 大日本聯合青年團參事 田中 確一

編成(十三箇中隊) 福島、岩手、東京、神奈川、埼玉、千葉、茨城、群馬、宮城、栃木、石川、福井、山形

牡丹江省方面隊

隊長 大日本聯合青年團訓練部長 神原 孝

編成(十七箇中隊) 宮城、靜岡、愛知、岐阜、三重、長野、山梨、京都、奈良、滋賀、大阪、鳥取、島根、廣島、福岡、佐賀(牡丹江省) 長崎(間島省)

滿洲派遣隊長に選ばれた藤懸少將は石川縣金澤市高岡町生れ土官學校第十八期生で宇垣陸相時代に櫻井團長の下に新聞職員をつとめた後、大隊長古賀長官に副官を兼任、シベリア事變に派遣され、昭和八年學徒生會議の結成以來青年學生と共に大陸建設に従ひ昭和十一年

大陸へ飼料増産部

農民道場

農林省では日滿農業の一體化を實現せしめるため今夏七月文部省の勤勞報國隊と呼び「飼料増産部」四百餘名を炎熱の大陸へ派遣することに決し目下準備を急いでゐる。その内容によるとまづ六月中旬ころまでに長野、埼玉、千葉、茨城、福島各縣の農民道場を中心とする増産部を編成したうへ、開拓地へ送り出し飼料の増産に當らせようといふのである

勤務期間は六箇、三ヶ月間とし收穫の済み次第内地に歸還させる予定だが、粒々汗の結晶たる玉蜀黍や高粱は郷土への土産として大部分持ち返らせ大小家畜の増産擴充に拍車をかける

大小家畜が殖えれば自給飼料がたんと取れて農村更生はいやが上にも強化されるわけだ、この畫期的計畫は今後全體的に擴大し年々大部隊を送り出し大陸に深い理解を持たせる「軍」友の精神と堅い

隊の組織を伝える『義勇軍旬報』11号

内地の滿蒙開拓青少年義勇軍訓練所が発行所となっていたが、記事の内容は滿洲現地の義勇軍(公式には義勇隊)員向けのものとなっている

戦争体験文庫資料展示一覧表		
回次	期 間	展示テーマ
1	平成17年11月1日～1月31日	戦争と少年たち
2-4	平成18年2月1日～3月30日/4月1日～5月30日/6月1日～7月30日	徴兵される青年たち/銃後の生活/占領下の生活（戦時下の国民生活）
5,6	平成18年8月1日～9月30日/10月1日～11月29日	ある教育実習生の日誌を中心に/学童疎開（戦争と教育1,2）
7-11	平成18年12月1日～19年1月30日/2月1日～3月29日/3月31日～6月28日/6月30日～9月27日	戦地・占領地での軍隊 ピラと軍票/村と軍隊1 村役場・在郷軍人会/村と軍隊2 勤労・増産・金属回収/奈良の戦争遺跡 奈良聯隊・奈良海軍航空隊（軍隊と地域1-4）
11-14	平成19年9月29日～12月27日/20年1月5日～3月27日/3月28日～6月26日/6月28日～9月28日	出征/戦地からの手紙/戦地への手紙/帰還（戦争と手紙1-4）
15,16	平成20年10月1日～12月27日/1月6日～3月29日	満州修学旅行/満州建設勤労奉仕隊・満蒙開拓青少年義勇軍（子どもたちが見た満州1,2）
17-20	平成21年4月1日～6月28日/7月1日～9月29日/10月1日～12月27日/1月5日～3月30日	米の配給と供出/野菜/調味料/代用食（戦争と食べもの1-4）
21	平成22年4月1日～6月29日	就職先としての軍隊 海軍志願兵
22	平成22年7月1日～9月29日	進学先としての軍隊 陸軍士官学校、海軍兵学校
23	平成22年10月8日～12月26日	工廠 国営兵器工場
24	平成23年1月5日～4月17日	貯蓄報国
25	平成23年4月19日～6月29日	大和の隣組 戦争を支えた地域組織
26	平成23年7月 1日～9月29日	大和錦 在郷軍人会奈良支部の活動
27	平成23年10月 1日～12月27日	産業組合から農協へ 戦時・戦後の協同組合の再編
28	平成24年1月4日～3月31日	赤十字 その成り立ちと展開
29	平成24年4月1日～6月28日/6月30日～9月27日/9月29日～12月27日/翌1月5日～3月28日	8.15で終わらなかった戦争/灼熱の陽の光の下で/病院船の上で（日赤奈良班看護婦の手記から1-4）
33	平成25年3月30日～6月27日	かるたで読む「戦陣訓」
34	平成25年6月29日～9月29日	小学生国史受験かるたの世界
35	平成25年10月3日～12月27日	大淀町学校支援地域本部 戦争カルタの世界
36	平成26年1月5日～3月27日	愛国百人一首を読む
37-40	平成26年3月29日～6月26日/6月28日～9月28日/10月1日～12月27日/翌1月6日～3月29日	日本統治下サイパンの日常から戦争へ/爆撃の中の逃避行/壕からかいみみた日本兵と米兵たち/極限の日々から（須藤ヨシエ氏の「サイパン島戦争体験記」を読む1-4）
41	平成27年4月1日～9月27日	あの日から70年 追想の8.15
42	平成27年10月1日～28年3月30日	進駐軍と奈良 <i>Occupied Nara</i>
43	平成27年4月1日～7月19日	昭和15(1940)年、紀元2600年祭 -あなたは知っていますか？-
44	平成27年7月20日～11月30日	「奈良連隊」がいた光景
45	平成28年12月1日～29年3月30日	陸軍少年兵
46	平成29年4月1日～7月27日	戦勝記念図書館の記憶/記録
47	平成29年7月29日～12月27日	鉄道連隊
48	平成30年1月5日～3月29日	民博所蔵戦時債権の世界
49	平成30年3月31日～8月30日	陸軍特別大演習 於奈良・大阪
50	平成30年9月1日～12月27日	日清・日露戦争と奈良（「明治150年大和から奈良へ」の一部として）
51	平成31年1月5日～4月30日	昭和8年12月23日「祝皇太子殿下御生誕」の時代
52	令和元年5月1日～8月29日	墨塗り教科書
53	令和元年9月1日～2年2月27日	聯隊区司令部
54	令和2年2月29日～6月28日	日中戦争
55・56・58	令和2年10月1日～3年1月28日/30日～4月29日/10月30日～4年2月24日	昭和13年の第3機関銃中隊1-3 ～部隊陣中日誌から
57	令和3年7月1日～10月28日	愛国と国防の相克 ～国防婦人会奈良本部と「大和婦人」
58	令和3年10月30日～4年2月24日	昭和13年の第3機関銃中隊3 ～部隊陣中日誌から
59	令和4年2月29日～6月29日	「奉祝国民歌紀元二千六百年」を“読む”
60	令和4年7月1日～11月11日	山口甚佐久撮影昭和十年代樫原周辺大和史蹟等アルバムより
61	令和4年11月12日～5年3月5日	『古都の弔旗』を読む
62	令和5年3月5日～6月29日	奈良県の招魂社と護国神社
63	令和5年7月1日～10月29日	空への憧れ ～ある戦死飛行兵の資料から
64-66	令和5年11月1日～6年2月28日/3月1日～6月26日/6月29日～10月30日	銃後の守1-3 ～吐田郷村出征軍人家族の会の記録から
67	令和6年11月1日～7年2月27日	二商森田君の『わが家の新聞』1940-42